



美術



■柏書房
■2018年1月刊
■定価 2,500円+税

消えたベラスケス

ローラ・カミング 著 五十嵐 加奈子 訳

16~17世紀中葉のスペイン文化は、当時の世界を牽引し「黄金の世紀」と呼ばれた。しかし17世紀中葉になると、かつての「陽の沈むことなき大帝国」の威光は霧散し、「無能王」フェリペ4世(在位1621~65)の統治下でひたすら破綻へと突き進む。それを何とか差し留めるべく、マドリッドとウィーンの両ハプスブルク家間の連帯強化のために同族結婚が繰り返されてきた。フェリペ4世も例外ではなく、神聖ローマ帝国皇帝フェルディナンド3世の娘マリアナを2番目の妻として迎えるが、なんと彼女は国王の実の姪であった。果せるかな1661年に生まれたカルロスは、精神的にも肉体的にも生来病弱で、「呪われた王」という異名を頂戴した。フェリペの死去を受けて4歳でカルロス2世(在位1665~1700)として即位し、35歳で世継ぎを遺さず薄幸な生涯を閉じた。ハプスブルク・スペインの無惨な終焉であった。

ところで、黄金の世紀の掉尾を飾ったのは、「画家の中の画家」と云われたベラスケス(1599~1660)だ。24歳という若さで宮廷画家に抜擢され、61歳で亡くなるまでその任に仕えていた。ところが、彼は手紙や日記のたぐいはもちろんのこと、絵画の署名もほとんど残さなかった。「肖像画の天才」と云われてい

たが、自画像と称する絵もすべて贋作と判明。彼が埋葬されたマドリッドの教会は、独立戦争期に侵入してきたフランス軍に蹂躪され、遺骸もなくなっている。40年以上のキャリアにもかかわらず、120点ばかりの作品しか遺していなかった。しかも彼の作品の大部分は、仕事柄、国王と宮廷のために描かれたのであって、描かれたその場所を離れることがなかった。1819年にプラド美術館が初めて作品を一般公開したが、それも40点あまりで、彼の作品を多少なりとも鑑賞できたのは裕福な旅行者くらいであった。晩年に描いた不朽の名画《ラス・メニーナス(女官たち)》に登場する画家がベラスケス本人とされている。

本書において、美術評論家の著者が2つのプロット——ベラスケスの生涯と、彼の絵の虜になった男の数奇な人生——を掘り起こし、不測不離の関係で双方は展開していく。

19世紀半ば、ロンドン郊外の町レディング。この町のパブリックスクールの閉校を受けて、備品のオークションが行われた。近くの書店主ジョン・スネアはチャールズ1世の肖像画が出品されることを知る。思いのほか安く入手したその絵は、イギリス王室のお抱え画家ヴァン・ダイクが描いたものだった。だが、スネアは、い

ろいろと調べた結果、これこそ「失われたベラスケスの絵」と確信する。その絵の来歴と系譜を綴った『1623年マドリッドにてベラスケスが描いたチャールズ皇太子、のちのチャールズ1世の肖像画の概要』を嚆矢として3冊の冊子を出版し、各地で大々的に展示会を開く。スペインの宮廷画家によるチャールズ1世の肖像画が発見されたというニュースはイギリス中を駆け巡り、スネアは一躍有名になった。

当時、著名な美術評論家といえども、スペインの宮廷画家の描いた絵を実際に見た人はほぼ皆無で、こうした絵の真実を見極めるのは至難の技であろう。やがて、「盗品」と告発され、裁判闘争に巻き込まれたあげく、スネアの書店も倒産し、妻子を養えなくなり、絵だけを持って単身、芸術の新天地ニューヨークへ移り住むが、赤貧のうちに亡くなる。彼の死後、クスコがその絵を持ち帰るが、レディングでの展示・オークションでも買い手が付かず、絵はいつしか忽然と消える。

たった1枚の絵に取り憑かれたスネアの強烈な思いと、襲いかかる悲劇の数々、それでも貫いた不退転の生き方から、後世の人々を夢中にさせるベラスケスの神祕が伝わってくる。「画家の中の画家」と云われるゆえんかもしれない。

ベラスケス 宮廷のなかの革命者

大高 保二郎 著



■岩波書店
■2018年5月刊
■定価 960円+税

畢生の大作《ラス・メニーナス》を描いたベラスケスが生きた17世紀スペインとはどのような国だったのか。飢饉とペストの襲来、絶え間ない対外戦争、国内では暴動・叛乱・革命の群発、新大陸貿易を含む経済活動の停滞、数回におよぶ破産宣言など「17世紀の危機」と云われる状況であった。ちなみに、17世紀ヨーロッパにおいて「30年戦争」を嚆矢として、1年中戦争のなかった年はわずか7年のみ。スペインとて例外ではなく、フェリペ4世の「寵臣」オリバーレス伯公爵が推進した「陽の沈むことなき大帝国」の再建は当時「邯鄲の夢」に過ぎなかった。

1623年、18歳の国王フェリペ4世によって弱冠24歳で宮廷画家に抜擢されたベラスケスは、その後、勅令により、私室取次係(27年)、王室衣裳係(36年)、王室侍従代(43年)、王室配室係(52年)、次いで王室配室長に任じられた。こうして彼は宮廷画家と廷臣の階梯を登りつめたものの、なぜか公文書類には自分の職名に廷臣の方を記入し、周囲からもそう呼ばれていた。ベラスケスが描いた国王の肖像画は、いずれもスペイン帝国の頂点に君臨する者としての威厳に満ち、堂々としているが、どうも彼の肖像画には何らかの作意が働いているのではないかと勘繰りたくなる。実際のところ、フェリペ4世は統

治者としては無気力で無能、放埒な生活を懲りずに繰り返す色魔、文芸擁護者・愛好者という点では詩人、金に糸目をつけない美術収集家、愛の遍歴ごとに罪の意識にかられ胸を静かに軽く打つ敬虔なカトリック教徒だからである。「寵臣政治」が惹起してきた権謀術策うずまく宮廷の真只中で、ベラスケスはどう生きたのか。

本書によると、封建的な宮廷社会では、手を汚す職業である画家を自ら公言するのは憚られることだった。それゆえ、ベラスケスは黙々と絵を描き、あるいは廷臣としての責務をひたすら果たし、宮廷においては異常なまでの沈黙を守り慎重に生きていた。そして56年、激務の合間を縫って、スペイン絵画史上初の王家の集団肖像画《フェリペ4世の家族》、愛称《ラス・メニーナス》を描いた。

縦318cm×横276cmの大きいキャンバスに描かれているほぼ同身長の11人の「家族」像を目の前にすると、絵画と現実との境界が撤廃されたような錯覚にとらわれるだろう。

この絵では、スペインでは初めてであるが、制作中の画家の自画像を王家集団肖像画と共存させている。国王夫妻との共生によって画家の姿もまた不朽なものに変わるのだ。画家は高貴な職業であるという、芸術家の社会的地位

の上昇を希求するベラスケスの自己主張であろう。そして絵の中の画家の胸には大きな赤い「サンティアゴ修道騎士団章」が描かれている。これは12世紀中葉、イベリア半島でのレコンキスタの最中に誕生した、最も由緒正しい騎士団であった。従って入団には「血の純潔」「貴族性」をはじめ厳しい資格審査をパスしなければならぬ。この絵が描かれたのは1656年。彼がサンティアゴ騎士団に入団できたのは1659年11月。おそらく国王の許可を得て、あるいは勧めで、ベラスケスは騎士団章を描き加え、晴れて正真正銘の貴族になった。こうまでして「貴族」になることにこだわったのは、彼は平民の出自であり、しかも「コンベルソ(改宗ユダヤ教徒)」の家系に繋がる可能性が高かったからだ。コンベルソの抹殺を目的として異端尋問所が1478年に初めてセビリアに設置された。セビリア生まれのベラスケスは異端尋問所の残酷さを十分に知っていたはずであり、コンベルソ的血筋を一刻も早く消去したかったのだろう。彼はサンティアゴ修道騎士となつて8ヶ月後に亡くなった。その間一度たりとも、公文書類においてこの名誉ある呼称を使わなかった。彼がハプスブルク朝スペインの終焉(1700年)と遭遇しなかったのは、せめてもの幸せだったかもしれない。

書評



川成 洋
Yo Kawanari

1942年札幌で生まれる。北海道大学文学部卒業。東京都立大学大学院修士課程修了。社会学博士(一橋大学)。法政大学名誉教授。スペイン現代史学会会長、武道家(合気道6段、杖道3段、居合道4段)。書評家。主要著書『青春のスペイン戦争』(中公新書)、『スペイン—未完の現代史』(彩流社)、『スペイン—歴史の旅』(人間社)、『ジャック白井と国際旅団—スペイン内戦を戦った日本人』(中公文庫)他。